

「短答式試験の圧倒的成績維持」と「AIフル活用の学習法」 財務会計論72点からの大逆転劇に見る、合格への最短ルート

インタビュー

今回インタビューにご協力いただいたS・Tさんは、学習開始から約1年後の短答式試験で財務会計論72点という厳しい結果に直面しながらも、そこから予備校の移籍と学習法の抜本的な見直しを行い、見事に合格を勝ち取りました。

特筆すべきは、その「徹底した本番想定のリターン学習」と、最新の「生成AIを活用したフィードバック分析」です。従来の学習法にとらわれない柔軟な発想と、精神的な余裕を生み出すための独自のキャリア戦略は、現在学習中の皆さんにとって極めて有益なヒントとなるはずです。

本記事では、S・Tさんの合格の秘訣を余すところなく語っていただいた対談の様子をお届けします。高野講師の教材活用法から、NotebookLMを用いた画期的な答案分析、そして精神面を支えた就職活動の実際まで、リアルな合格体験記をご覧ください。

合格者紹介

S・Tさん

・経歴：

他予備校からの移籍組。財務会計論の計算に苦手意識を持っていたが、渡辺講師の解説講義を見てCPAに移籍を決意。

・学習スタイル：

最新のAI技術を駆使し、学習効率を最大限まで高める。テキストに書き込みをしないという珍しいスタイルで合格を勝ち得た。

・モチベーション：

撤退時期を定め、不合格なら諦めて就職をするという割り切った考え方で学習を進めた。

財務会計論72点からの再出発と CPAへの移籍決断

—S・Tさんは短答式試験の答練において、非常に高い成績を維持されていたと伺っています。まずはその要因について、アンケートでは「高野講師の教材を利用したことが大きかった」と回答されていますが、具体的にどのような点が成績向上に繋がったのでしょうか。

S・T：

高野講師の「**短答対策講義**」を活用することで、**本試験レベルの「ひっかけ問題」への対応力が身についたことが最大の要因**です。高野講師の問題には、1つの問題の中に本試験と同様のひっかけポイントが3つも4つも盛り込まれています。これを**回転**させていくことで、本番でもスムーズに対応できるようになりました。

—なるほど。通常のテキストや例題レベルの学習とは、どのような違いを感じていましたか。

S・T：

学習初期は一般的なテキストの例題ベースで勉強していましたが、それだけだと「このパターンのひっかけが出ると対応できない」という事態に陥ることがありました。そこで、単なる例題学習ではなく、最初から「**本番形式**」の問題を**回転**するスタイルにシフトしました。その結果、**成績が明確に向上**しました。

—S・Tさんは学習の途中からCPAへ移籍されたとのことですが、その経緯についてもお聞かせください。

S・T：

学習を開始したのは2023年の4月頃で、最初は簿記3級から別の予備校で学習を始めました。しかし、2023年12月の短答式試験を受けた際、結果を見て「このままではいけない、環境を変えなければ」と痛感しました。

――具体的に、どのような結果だったのでしょうか。

S・T:

監査論と企業法はどちらも80点取れていたのですが、財務会計論が200点満点中72点しか取れず、**全く手も足も出ない状態**でした。特に**計算問題**がほとんど解けていませんでした。前の予備校は**例題ベース**で学習を進めるスタイルでしたが、それが自分には合っていなかったのだと思います。

――そこからCPAを選ばれた決め手は何だったのですか。

S・T:

渡辺講師がYouTubeで公開されていた**短答式試験の解説動画**を見たことがきっかけです。そこで解説されていた「**タイムテーブルの書き方**」が、私にとって非常に分かりやすかったのです。前の予備校でもタイムテーブルの書き方は教わっていましたが、自分にはしっくりきていませんでした。しかし、渡辺講師のやり方は非常に相性が良く、「これならいける」と感じてCPAへの移籍を決断しました。

教材の質と「高野レジュメ」を選んだ理由

――実際にCPAに移籍されてみて、予備校間の違いや教材の質について、どのように感じられましたか。

S・T:

CPAの質の高さを痛感しました。特に**動画講義の編集や教材の作り込み**が素晴らしいと感じました。例えば、渡辺講師や池田講師の講義では、**パワーポイントをリアルタイムで動かしながら図解を用いて解説**してくださるので、非常に理解しやすいです。前の予備校では動画編集があまりされておらず、画質や音声の問題、図解の少なさなどを感じていたので、その質の差は歴然でした。

――移籍前に抱いていたイメージと、入会後の実態にギャップはありましたか。

S・T:

渡辺講師のYouTube動画などでイメージは掴んでいたのですが、**大きな乖離はありません**でした。講義の量が多いことや、答練のスケジュールがタイト

であることは事前に覚悟していたので、そこに対する驚きもありませんでした。

――渡辺講師には「コントレ」という有名な計算教材があります。S・Tさんはコントレではなく、高野講師のレジュメを使い続けられましたが、そこにはどのような理由があったのでしょうか。

S・T:

コントレは短答だけでなく、論文式試験まで見据えた高い計算力を養うための教材だと認識しています。そのため、**レベルも高く分量も多い**です。当時の私としては、まずは目の前の「**短答式試験**」を突破しなければ話にならないという危機感がありました。そこで、**短答対策に特化**している高野講師の教材を選んで集中することにしました。

「木を見て森を見ず」からの脱却とテキスト回転術

――続いて、学習方法について深掘りしていきたいと思います。学習初期を振り返って、「こうしておけば良かった」という反省点や、現在の学習法との違いはありますか。

S・T:

講義を2倍速で視聴し、1日に何本も消化するスタイルは学習初期から現在まで変わっていません。ただ、初期の頃は「**全体像**」を掴めていなかったのが反省点です。目の前の問題を解いていても、「**今、自分はこの問題で何をやっているのか**」という位置づけが分かかっていませんでした。

――全体像を掴むというのは、具体的にどういうことでしょうか。

S・T:

一度試験に落ちた際、簿記3級のレベルまで戻って復習をしたのですが、その時に「**勘定科目がBS（貸借対照表）項目なのか、PL（損益計算書）項目なのか**」すら、あやふやな理解だったことに気づきました。まさに「**木を見て森を見ず**」の状態でした。それからは、**常に一步引いて**「**今、自分は全体のどこを学習しているのか**」を意識するようになりました。最初からフローチャートなどを見て**全体像を把握**する習慣があれば、もっと効率的だったと思います。

――では、テキストの具体的な活用法や「回転」のさせ方について教えてください。

り入れていたのでしょうか（AIフィードバックの詳細については本記事末尾参照）。

S・T:
Googleの「**NotebookLM**」や「**Gemini**」を活用していました。特に論文式試験の対策において、答練の復習にNotebookLMを使っていました。

――どのように使うのですか。

S・T:
まず、答練の問題、模範解答・解説、そして自分が書いて採点された答案用紙、これらを**全てPDFなどのデータとしてNotebookLMに読み込ませます**。さらに、例えば財務会計論であれば、講義で使用している理論レジュメの**データも全てインポートして、「知識ベース」としてAIに与えます**。その上で、「自分の答案のどこができていないのか」「何が足りないのか」を**AIにフィードバック**してもらいます。

――AIに講師の役割をさせていたわけですね。そのフィードバックの精度や妥当性はどうでしたか。

S・T:
精度はかなり高かったです。具体的に「この問題のこの部分の記述が不足している」といった指摘をしてくれます。さらに、**プロンプト**（指示出し）を工夫して、「今の自分にはどのような対策が必要か」と問いかけると、今後の**具体的な勉強法**まで提案してくれました。

――それは非常に興味深いです。具体的にどのようなフィードバックがあったのでしょうか。

S・T:
例えば、私の答案には「基本的な**用語の定義**や**暗記項目**の記述はできているが、**事例へのあてはめ**や、**基準の文言**を活かした**具体的な説明**に課題がある」といった分析がなされました。具体的には、「**職業的専門家としての判断**」という言葉の定義は書けていても、「**何のためにその行為をするのか**」という目的部分の記述が弱い、といった指摘です。

――ベテラン講師のような的確なアドバイスですね。

S・T:
はい。他にも、「資料の数値データと非財務データの矛盾を見抜く力が弱い」という指摘や、「監

S・T:
高速回転については、直前期には高野講師の短答対策レジュメを「**1日で全範囲回せる**」くらいのスピードで回していました。

――1日で全範囲ですか。それは凄まじいですね。回転させるためにテキストに何か工夫をされていたのでしょうか。

S・T:
実は、テキストへの**メモ書きや加工は一切しない**タイプなんです。テキストは常に**真っ白な状態**で使っていました。計算の下書きやタイムテーブルなどは別の計算用紙に書き、その紙は毎回捨てていました。

――テキストを汚さない派なんですね。

S・T:
はい。読み込みに関しても、飛ばし読みはしませんが、とにかく**速く読む**ことを意識していました。暗記すべき文章などは**空で言える**ようにチェックしつつ、財務だけでなく**管理会計や監査論**などの理論科目も、ものすごいスピードで回していました。

――企業法に関しては、事前にいただいた資料を拝見すると、多少書き込みがあるように見えましたか。

S・T:
あれは青木講師が**講義内で書き込みをした状態**のPDFデータをダウンロードして使っているものです。ですので、文字やマーカーは全て青木講師によるもので、**私自身が書き込んだものではありません**。唯一加工した点としては、答練で出題された論点や間違えた箇所について、PDF編集ソフトを使って該当箇所の画像をテキストの下部などに貼り付けることくらいです。例えば、「**提訴期間内に訴えを提起しなかった場合**」といった論点の画像を貼り付けて一元化していました。

生成AI「NotebookLM」を活用した画期的な学習法

――事前のアンケートで非常に気になったのが、「AIフィードバック」の活用です。これは具体的にどのようなツールを使い、どのように学習に取

査リスク・モデルを具体的な事例に適用する記述が不十分」といった課題点を洗い出してくれました。その上で、「答案構成（思考プロセス）を重点的に復習すべき」「知識を吐き出す段階から、加工して答える段階への移行が必要」といった、本試験に向けた**具体的なアドバイス**も貰うことができました。

——自分の手書き答案もAIは認識するのですか。

S・T:

はい、採点済みの手書き答案用紙をそのまま読み込ませていましたが、**問題なく認識**していました。レジュメの内容も全て入れているので、気になった論点について「これって何だっけ?」と聞けば、レジュメの中から該当箇所を検索して教えてくれるので、**検索ツール**としても非常に優秀でした。

計画・分析と「就活」によるメンタルコントロール

——学習計画や分析については、どのように進めていましたか。

S・T:

計画についてはあまりガチガチに固めず、寝る前に「明日はどの科目のどのあたりをやろうか」と決める程度でした。朝起きて悩まずにスタートできるようにするためです。1ヶ月単位の**長期計画は立てていません**でした。論文期は、講義が配信されたらすぐに視聴し、それ以外の時間は復習に充てるという、**CPAのカリキュラムに沿った**シンプルな進め方でした。

——答練の分析は、先ほどのAI活用が主だったのでしょうか。

S・T:

AIも使いつつ、解説動画を全て見て、できている箇所とできていない箇所を把握していました。特に租税法は、過去の答練でやった内容を忘れてしまうので**何度も解き直し**を行いました。管理会計論は、パターン学習の要素が強いので、**答練を回転教材の一つ**として組み込んで回していました。

——続いてメンタル面についてお伺いします。

「気持ちを強く持つこと」が重要だという声も多いですが、S・Tさんはどのようにモチベーションを維持されていましたか。

S・T:

12月の短答式試験や8月の論文式試験の際、「**もし落ちたら、きっぱり諦めて就職しよう**」と決めていました。試験前の休憩時間にも、スマホで就職できそうな企業を探したりしていました。「最悪の場合でも、就職先はあるしなんとかなる」という選択肢を持っていたことが、精神的な余裕に繋がっていたと思います。

——いわゆる「背水の陣」ではなく、逃げ道というか、別の選択肢を用意しておくスタイルだったのですね。

S・T:

はい。実際、短答式試験に合格した後、10月後半から11月の合格発表までの期間に就職活動を行いました。「CPASSキャリア」や「マイナビ会計士」を利用していました。エージェントの方が非常に手厚く、面接後に毎回電話でフィードバックをくれるなどサポートが充実していました。

——具体的にどのような企業を受けられたのですか。

S・T:

レバレジーズ株式会社、ジャスネットコミュニケーションズ、税理士法人、そして中小監査法人2社など、**合計5社**ほどを受けました。結果として中小監査法人2社から内定をいただき、レバレジーズも最終面接まで進みましたが、論文式試験の合格が分かったので辞退しました。

——論文式試験の結果が出る前に、かなり本格的に動かれていたのですね。もし論文に落ちていたら、監査法人ではなく一般企業への就職を優先するつもりだったのですか。

S・T:

そうです。もし落ちていたら、勉強を続けるよりも**一般企業への就職**を優先するつもりでした。中小監査法人の内定は、ある意味で「滑り止め」のような感覚でした。

私は既卒1年目で無職期間があったことや、学生時代にプログラミングやAIに触れていた経験から、「**企業に勤める意味**」や「**会計士の将来性**」について冷静に考えていました。AI技術が発展すれば、会計士の業務の一部は代替される可能性があります。そういった将来の不確実性を考えると、もう1年勉強期間を延ばすよりも、早く実務に入ったり、AIを活用したビジネスに関わったりといった「**分かりやすい行動**」をとった方が良いと考えていました。

――なるほど。そうしたキャリアに対する冷静な分析と準備があったからこそ、論文式試験本番でも「ダメでも他がある」という精神状態で臨めたわけですね。

S・T：

そうですね。過度に思い詰めることなく、**メンタルを平準化する効果**は間違いなくあったと思います。

受験生へのメッセージ

――貴重なお話をたくさんありがとうございました。最後に、現在学習中の受講生に向けてメッセージをお願いします。

S・T：

CPAの講義や教材は本当に質が高いです。これらを信じてやり切れば、間違いなく合格できるレベルにいくと思います。あとは「自分がやるかやらないか」だけです。教材の質は担保されているので、**自分を信じて**、目の前の課題に取り組んでください。

――ありがとうございます。CPAに対しても一言いただけますか。

S・T：

本当に質の高い教材を提供していただき感謝しています。**合格への再現性**が高く、特に短答式試験に関しては「CPAの教材でなければ対応できなかった」と感じる問題がいくつもありました。この環境のおかげで合格できたと思っています。ありがとうございました。

まとめ

今回のS・Tさんの合格体験記におけるポイントは以下の通りです。

・「**本番形式**」への早期シフト：

例題レベルにとどまらず、ひっかけポイントを含む本試験レベルの問題を回転させることで対応力を磨いた。

・**徹底した教材の一元化とクリーン化**：

テキストには書き込まず、常に真っ白な状態で演習を行うことで、記憶の定着を純粹に確認した。

・**生成AIの積極活用**：

NotebookLMに答案や教材を読み込ませ、客観的なフィードバックと対策案を得る「デジタル勉強法」の実践。

・「**選択肢**」を持つ**メンタル管理**

「落ちたら就職する」という具体的なプランBを用意し、精神的な余裕を持って試験に挑んだ。

S・Tさんの事例は、自分に合った環境への移籍や、最新ツールの活用といった「変化を恐れない姿勢」が合格を引き寄せたことを示しています。皆さんも、現在の学習法に悩みがある場合は、視点を変えて新しい方法を取り入れてみてはいかがでしょうか。皆さんの合格を心より応援しています。

次ページ以降、S・TさんのAIフィードバックを掲載しています。

(プロンプト) 答練の採点や回答解説を参照して、できている点、課題点を洗い出して

ご提示いただいた3回分の「論文直前答練」の採点済み答案(-)と、それぞれの解答・解説(-、-、-)を照らし合わせ、現在の到達点と今後の課題を整理しました。

全体として、**基本的な定義や典型論点の暗記は進んでいます**が、「事例へのあてはめ」や「基準の文言を活かした具体的な説明」に課題が見られません。

1. できている点 (現在の強み)

- **基本用語の定義の把握** 「職業的専門家としての判断」や「職業的懐疑心」といった、監査論の根幹をなす用語の定義は概ね正確に記述できています。
- **典型的な制度論・暗記項目の定着** 「会計方針の変更の正当な理由(5項目)」などは、完璧に記述できており、得点源となっています。また、不正リスク要因の3要素(動機・機会・正当化)を資料から抜き出す作業も高い精度で行えています。
- **基本的な事例の判別能力** 修正後発事象と開示後発事象の区別や、内部統制報告書の付記事項にすべき事象の選択など、基本的な事例の判断は正確です。
- **重要性の基準値に関する基本理解** 業績の修正に伴う重要性の基準値の改訂(引き下げ)の必要性など、状況変化に応じた判断は適切に行えています。

2. 課題点 (今後の強化ポイント)

① 制度の「目的」や「意義」の深い理解と記述

単に用語を知っているだけでなく、「なぜその手続が必要か」という一段深い問いへの回答が不十分です。

- **課題:** 第1回問1「職業的専門家としての判断が果たす役割」で、単なる定義に留まり、「会計上の見積りの合理性について結論を導く」という核心部分の記述を欠いていました。
- **対策:** 基準が定める「目的」の規定(監基報200など)を読み込み、「何のためにその行為をするのか」という結論部分を明確に書く練習が必要です。

② 資料の「矛盾点」を見抜く分析力の強化

事例問題において、資料に示された数値や状況の「不自然さ」を見落とす傾向があります。

- **課題:** 第2回問2で、店舗BとCの営業費用の不自然な増減(160百万円の付け替え)という不正の決定的な兆候を指摘できず、配点16点に対し4点に留まりました。
- **対策:** 資料に数値データ(前年比較など)が出ている場合は、「**非財務データ(客数など)と財務データ(費用など)に矛盾がないか**」を疑ってかかる姿勢を強化してください。

③ 「未公表情報」や「経営者確認書」に関する作文力

難易度の高い「作文型」の問題で、得点が伸び悩んでいます。

- **課題:** 「監査上の主要な検討事項(KAM)として未公表情報を記載する場合のプロセス」や、「経営者確認書で特定の会計上の見積りの陳述を入手する目的」などが0点または低得点でした。
- **対策:** 基準の「適用指針」にある具体的な対応手順(例:経営者に追加開示を促すプロセス等)に目を通し、**監査人と企業(経営者・監査役)のやり取りの流れ**をイメージできるようにしてください。

④ 監査リスク・モデルの具体的適用

IT環境や組織変更が、具体的にどのリスク(固有リスクか統制リスクか)に影響し、どのような対応(全般的な対応か個別手続か)が必要かを結びつける記述が弱いです。

- **課題:** 第2回問3で、高度な基幹システム導入や経理部長の交代が「IT専門家の利用」や「補助者の増員」という具体的対応に結びつくことを指摘できていませんでした。
- **対策:** 「**変化=リスクの変化**」と捉え、それが「人員配置」や「手続の種類・時期・範囲」にどう影響するか、セットで考える習慣をつけてください。

アドバイス：本試験に向けて

現在のあなたの実力は、「知っている知識を吐き出す」段階から、「資料に応じて知識を加工して答える」段階への過渡期にあります。

今後は、解説にある**「答案構成（思考プロセス）」**を重点的に確認してください。なぜその結論に至るのか、資料のどこに着目すべきだったのかを復習することで、現場思考型の問題でも得点を安定させることができます。

知識の習得は、地図を持っているようなものです。しかし、監査論の論文式試験は、その地図を使って**「霧の中（複雑な事例）で正しい道（監査手続）を選ぶ」**ことが求められます。資料という景色をよく観察し、手元の地図（基準）のどこを引用すべきかを判断する訓練を続けてください。